ブラック・ブレット　記憶の覇者

在原昴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人や物体の記憶を読み取ることができ、真理に最も近い自称ただの一般市民の闇医者少年、薊島遥、何故かガストレア因子を持ったまま十四歳になった記憶喪失の従者少女、七星涙音、二人はとある理由から賞金首となり、世界から追われる生活を送ることとなってしまったリクエストがあったので書いてみました

色々と原作崩壊がありますので、苦手な方はプラウザバックを推奨します

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 4
第3話 …… 9
第4話 …… 14
第5話 …… 18
第6話 …… 21
第7話 …… 25
第8話 …… 27
第9話 …… 31
第10話 …… 34
第11話 …… 37
第12話 …… 42

第1話

夕暮れの東京の廃墟、そこに黒い手袋をはめた白いメッシュの十七歳ほどの竹刀袋を背負った少年と青いツインテールの長袖の服を着た十四歳くらいの少女が紅茶を飲んでいた

？1「お前の入れてくれた紅茶は何時でもおいしいな」

？2「マスター、ありがとうございます」

少女は嬉しそうに微笑んでいた

少年は紅茶を飲みほし、立ち上がった

？1「そろそろ出発するぞ」

？2「了解しました」

その時、少年は脇腹を何かで撃ち抜かれた

振り向くと武装した警官らしき人間がいた

警官？「漸く見つけだぜ？　薊島遥、七星涙音」

遥「ッ!!」

涙音「マスター!?」

涙音と呼ばれた少女は倒れそうになった遥と呼ばれた少年を何とか支えた

遥「…今度の依頼主は誰だ…」

警官？「教えるかよ、テメェ等を始末すりゃ大金が転げ込む、給料の低い警官暮らしとはおさらばさ」

警官らしき人物は拳銃を遥と涙音の方に向け、勝利を確信しながら遥に近づき始めた

だが、涙音からは途轍もない殺意があふれ出しているのに、警官は気が付かなかった

涙音「マスターに…」

警官？「あ？」

涙音「マスターに近寄るなァァァァァァ!!!!」

涙音は叫びながら警官らしき男性に襲い掛かった

警官らしき男性は涙音の出した大声で怯み、一瞬の隙が出来た

その隙を見逃さず、涙音は恐ろしい速さで接近し、腹を殴り、警官

らしき男性は数メートル吹き飛び、地面に叩き付けられた
それだけでは終わらず、涙音は警官らしき男性の腹を踏みつけた、よく見ると、涙音の目が赤く染まり、瞳孔が縦になっていた
警官？「な…何なんだよ…お前は…」
涙音「マスターの害悪は排除します…」
遥「ストップだ、涙音!!」
遥は撃たれた脇腹を抑えながら何とか立ち上がった
涙音は遥の声に反応して殴るのをやめた
涙音「マスター!?　お怪我は!?」
遥「何、大したことはない…それよりも、これはやりすぎだ…あと少し俺が止めるのが遅かったら死んでいたぞ…」
警官らしき男性は蹲ったまま起き上がることが出来ずにいた
だが、警官らしき男性は助かったと思い、安堵していた
涙音「申し訳ありません、マスター」
遥「…分かれば良い…さて…お前の雇い主…見させてもらうぞ…」
遥は黒い手袋を外し警官らしき男性の頭に触れた
十秒後、手を放すと、持っていた拳銃を取り上げ、どこかに放り投げた
遥「涙音、こいつもはずれ(バ)だ」
涙音「そうでしたか、マスターどうします？」
遥「…放っておくか…お前があれだけやったんだ、俺等に来ることはもうないだろう…それよりも、どこか休める場所に行かないとな…」
遥は手袋を着け直すと、そのまま歩き出そうとしたが、激痛で歩くこともままならなかった
涙音は急いで鞄から包帯と消毒薬を取り出した
銃弾は幸いにも掠っていただけだったらしく、銃弾が体内に入っていることも無かった
そして、応急処置が終わり、涙音は遥を背に乗せて歩き出した

歩き出していると、偶然にも町中に入ってしまった

町の人達は少女が少年を背負って歩いている光景を不思議に思いながら見ていた
だが、すぐに視線を外した、涙音が赤い眼をで見ている人を睨んでいるからである
少しだけここで昔の事を話そう
２０２１年、突如としてガストレアと呼ばれる怪物が現れ、世界に大打撃を与え、今現在も大きな傷跡を残している、その中でもガストレア因子を持った子供達は呪われた子供達と呼ばれ、迫害されている
中にはイニシエーターと呼ばれる者もおり、彼女たちはプロモーターと共にガストレアの駆除に当たっている
ここで話を戻そう、涙音は何処か落ち着ける場所を探そうとしているが、誰に頼るべきかわからず、ただ彷徨っていて、衰弱している遥を安全な場所に連れていくことができていなかった
その時、涙音はとある看板を見かけた
【天童民間警備会社】
涙音は一か八かの賭けに出るべく、偶然開いていた窓を見かけた
涙音「マスター、申し訳ありません、ですけど少し耐えてください!!」
涙音はそう言うと、目を赤く光らせ、開いている窓に向かって跳躍し、中に入った
中に入ると、高校生らしき男女と、一人の少女が驚いた形相で見ていた
それもそうだ、赤い眼の１４歳くらいの少女が年上の少年を背負って窓から入ってきたのだから
涙音「申し訳ありません、マスターをお助けください!!」
この出会いが、新たな物語の始まりを告げた

第2話

遥が気が付くと、そこは見慣れない天井が広がっていた
遥「ここは」
涙音「マスター…？」
声の方を見ると、涙音が心配そうな眼で見ていた
遥「…涙音？」
涙音「良かった…気がつかれて…」
遥「おいおい…俺は不死身だ、簡単には死なない…それにしても此処は何処だ？」
？「気がついたか？」
黒髪で幸薄そうな顔の男子高校生の制服を着た少年が遥に近づくが、涙音が睨んでいた
遥「悪いな…涙音はいつもこんな感じだ…えっと…」
？「里見蓮太郎、天童民間警備会社のプロモーターだ」
遥「薊島遥、こいつは七星涙音だ」
涙音「…マスターの僕の涙音です…マスター、里見様と握手してみてはどうですか？」
遥「そうだな…」
遥は手袋をはずし、蓮太郎の手を取った
すぐに離すと涙音に耳打ちした
蓮太郎「おい、どうかしたのか？」
遥「いや…それよりも天童木更社長はいるのか？」
遥はここにいない人物の名を口にした
それにより、蓮太郎は警戒し、ホルスターから拳銃を取り出そうとしていた
だが、拳銃を抜くよりも早く涙音は、鉤爪を蓮太郎の首筋に突き立てていた
遥「涙音は俺に危害を加えようとするものには加減ができない…それに今のようになる…それと、此処の社長の名前を当てたのはお前の記憶を見たからだ」

蓮太郎「俺の記憶？」
遥「ああ、俺は触れたものの記憶を覗ける…それとお前の相棒、藍原延珠のことも見させてもらった…」
それを言った遥の目は蓮太郎を哀れんでいた
遥「…なんと言うか…お互いに大変だな…」
蓮太郎「おい、どういうことだ？」
蓮太郎は遥の言った意味が分からず、どういうことかを聞き出そうとしたが、それは別の人物に止められた
その人物は黒く長い髪の高校生らしき少女と小学生くらいの少女だった
遥「あんたが天童民間警備会社の社長、天童木更か？」
木更「な!?」
？「おお、お主は何でもわかるのか？」
遥「そうだな、蓮太郎の情報なら何でも知っているぞ？延珠」
延珠と呼ばれた少女は興味津々と言う顔で遥を見ていた
遥は少したじろぎ、木更は蓮太郎を見た
蓮太郎「何でも、触れた物から記憶を読み取ることができるそうです」
木更「触れた物から…何だか嫌な能力ね」
蓮太郎「そうですか？」
木更「考えてもみなさい、里見君、自分のプライベートまで覗かれるのよ!?」
蓮太郎は少し自分の私生活の事を思い出し、遥の力が危険だという事に気が付いた
遥本人は延珠の相手で大変そうに見える
だが、それは涙音によって止められた
涙音「マスター、そろそろ夕食の時間です」
遥「そうだな…何処か近くで食える店でも探さないとな……ん？」
遥が振り向くと木更がこちらを見つめていた
極貧生活を送っている彼女にとって外食はかなり羨ましい物だった

遥「…なあ、お前等さえ良ければ一緒に食べるか？介抱してもらった礼だ」
木更「本当!?」
遥「ああ…別に構わない…」
蓮太郎「俺等も良いのか？」
涙音「マスターが良いと言っているのだから大人しく従いなさい」
涙音は蓮太郎をにらみつけ、蓮太郎は冷や汗をかいていた
そんな蓮太郎を余所に、延珠は目を輝かせていた

近くのファミレスに来て、遥歌達は食事を共にしていた
延珠「蓮太郎、ここは美味しいな」
蓮太郎「食ったのなんて安売りの時以来だな」
涙音「どれだけ貧しいのか理解しました…マスター、本当によろしかったのですか？」
遥「仕方が無いだろ、まさか俺にここまでの妬みの目線を送る奴がいるなんてな…」
遥はそう言いながらビーフステーキを食べている木更を見た
木更はそんな視線を気にすることなく食べていた
蓮太郎「それにしても良いのか？俺等の分まで奢って？」
遥「問題はない、資金は仕事で稼いでいる」
蓮太郎「仕事？　あんたも民警か？」
涙音「いいえ、医者です」
蓮太郎「医者!?」
それを聞いた蓮太郎は思わず立ち上がった
そして、周囲は蓮太郎を見てしまった
遥「落ち着け、厳密には裏社会の医者だ」
蓮太郎「だって、あんた俺と同い年だろ!?」
遥「ああ、だから闇医者だ、一応色んな所のお偉いさんとも精通しているから資金には困らないがな…」

遥は頼んでいたスパゲッティを食べ、その後、水を飲んだ
延珠以外の二人は目を丸くして遥歌を見ていた
遥「それはそうと、お前等黒い熊手を持った人間を知っているか？」
木更「黒い熊手？」
遥「知らないなら別に良い…」
そして、食事を終え、遥がレジで支払いを済ませた
その帰り道、木更と別れ、遥と蓮太郎達は同じ道を歩いていた
蓮太郎「なあ、なんで付いてきたんだ？」
遥「俺が行く方向が偶然お前等と同じだっただけだ…」
涙音「マスター、血の臭いがします」
涙音は遥に警告し、遥は竹刀袋から一本の日本刀を取り出し、抜刀した
そして、奥から口から血を滴らせた蚤の姿をしたガストレアが現れた
遥「蚤か…涙音…狩るぞ？」
涙音「イエス、マスター」
涙音は目を赤く輝かせ、鉤爪を装備して蚤のガストレアを殴った
その威力はすさまじく、ガストレアが簡単に空高く飛ばされた
そして、遥は落下地点に刀を構えて立っていた
遥「…幻月流剣術…【青梅】!!」
遥は蚤のガストレアを下から斬りつけた後、距離を取り、蚤のガストレアが地面に落ちた後、背中を切り裂いた
延珠「凄い…遥も涙音も…強い…」
蓮太郎「ああ…だが、まだ死んでいない…」
蚤のガストレアは何とか立ち上がり、遥歌達に飛びかかった
遥は刀をしまい、背を向けて一枚のディスクを取り出した
蓮太郎「おい!!　後ろ!!」
遥「問題はない…もう終わっている…」
その瞬間、蚤のガストレアの体が光の粒子に変わり、ディスクの中に吸い込まれ、光が収まるとディスクには蚤が跳ね回るアニメーションの描かれていた

蚤のガストレアがいた場所を見ると、そこには何もいなくなっていた
蓮太郎と延珠はそれをただ茫然と見ているだけだった
遥「回収完了…こいつはもう持っているから…涙音、頼んだ」
涙音「かしこまいりました」
遥はディスクを空に投げると、涙音は自分の前に来たタイミングでディスクを殴り、破壊した
遥「よし、涙音、今晩の宿を探すか…」
蓮太郎「おい、今のなんだよ!?」
延珠「ガストレアが光になってディスクに入って、涙音がドカーンって!!」
遥「そうだな…また今度説明してやるよ」
遥は刀を竹刀袋に入れ、涙音と共にその場を去って行った

第3話

朝、遥は目が覚め、辺りを見回すと近くで涙音が眠って　いた　遥は涙音を起こそうとして、体を揺すった

遥「涙音、朝だぞ…起きろ…」

涙音「うぅん…マスター…駄目ですよ…そんな…破廉恥　なこと…」　遥「おい、なんて夢見ていやがるんだ…良いから起き　ろ…！」

遥が起こそうとした時、寝ぼけている涙音に抱き付か　れ、身動きができなくなっていた

遥「おい!!起きろ!!俺は抱き枕なんかじゃねぇ!!」

涙音「マスターが望むのでしたら私は…」

遥「(あ、やべぇ…色々と発達して…そして…なんだか　いい匂いが…)」

遥は完全に涙音の抱き枕状態になっていたが、残り少な　かった精神で涙音を起こした

涙音「…あれ…？　マスター…？」

遥「涙音…お前…」

遥は呆れながら、漸く起き上がり、朝食を食べるために　市街地に向かった

その時、一枚の紙が置いてあった

遥と涙音はコンビニで朝食のサンドイッチを購入した　後、食べながら紙に指定してある場所に向かうと、何処かのビルにたどり着いた

遥「…ここは…防衛省か…さっさと通り過ぎるぞ……涙音？」

涙音「マスター…血の匂いがします…それも大勢の人間の…」

遥は面倒そうに防衛省のビルを見ると、警備員が殺害　されていたひとりだけではなく大勢の人間が刃物のようなもので　切られて殺害されていた

遥「…ッ!!涙音!!　犯人の匂いを辿れるか!?」

涙音「はい!!最上階の部屋からします!!」

遥「上るのも面倒だ…こいつで行くか!!」

遥は鴉が羽ばたくアニメーションの描かれたディスクを　投げる

と、そこから光の帯が立ち上り、巨大な鴉が現れ　た　遥と涙音はその背に乗り、鴉は飛び立った　そうして、最上階のまで来ると、窓を綺麗に楕円型に切り抜き、涙音と共に中に入っ　た

遥「…民警の同窓会…ってわけじゃなさそうだな…」

遥は堂々と中に入ると、シルクハットにタキシード、　笑った仮面といったふざけた格好の男性がテーブルに　立っていて、何人かの民警が拳銃を向けていた　無論、入って来た遥の方にも注意が行った

？「おやおや？　君は確かパンドラの箱の少年か」　遥「俺はそう呼ばれるのは嫌い何だが…蛭子影胤…!!」　？「失礼、だけど、君も標的にされてしまったようだ」

影胤と呼ばれた男性に言われると、遥は数人の民警に　銃を向けられていた

遥「…クソ最悪だな…涙音、血の匂いは？」

涙音「あそこからします」

涙音が見た方角には蓮太郎が見えた　そして、モニターの方を見ると、白髪にウエディングド　レスのような礼服を着た美しい少女、東京エリアを統括している人物だ　遥はそれを確認すると、溜息を付いた

影胤「おっとすまない、紹介しよう、小比奈、おいで」

小比奈「はい、パパ」

その言葉と共に、黒いドレスのような服を着た少女が　蓮太郎の背後から現れ、影胤の元に駆け寄って来た

小比奈「蛭子小比奈、十歳」

影胤「私のイニシエーターにして…娘だ」

小比奈と名乗った少女は礼儀よくお辞儀をした後、蓮太　郎のほうを見た

小比奈「パパ、あいつ銃をこっちに向けてるよ、斬って　良い？」

影胤「よしよし…まだ駄目だ、我慢なさい」

小比奈「ぶぅ～、パパ」

小比奈は不満そうに頬をふくらました

蓮太郎「何の用だ」

影胤「私もこのレースにエントリーすることを伝えたくてね、七星の遺産は我々が頂くと…」
遥「七星の遺産…!?」
影胤「おっと、君には教えていなかったけど、彼らが探すことになっているケースの中身さ、君の相棒とも縁があったね、七星涙音」
遥と涙音は臨戦態勢に入り、蓮太郎は何かを考えていた
影胤「ルールの確認をしようじゃないか…私と君達、どちらが先に七星の遺産を手に入れるかの勝負だ、掛け金は…君たちの命でどうだ？」
大男「グダグダうるせぇんだよ!! ブッタ斬れろやぁぁぁ!!!」
影胤が嬉しそうに全体を眺めると、筋肉質の大男がブチギレ、バラニウム製の大剣を振りかぶった
その一撃は影胤、に当たることなく、何かに弾かれた
影胤「残念♪」
大男「な!?」
男性「下がれ!!将監!!」
将監と呼ばれた大男は後ろに跳び、周りにいた遥以外の人間は拳銃を影胤に向かって発砲した
だが、どの攻撃も何かに阻まれ、銃弾はまるで空間に張り付けられていた
蓮太郎「バリアー!?」
影胤「斥力フィールド、私はイマジナリィ・ギミックと呼んでいる」
遥「お前…人間なのか…!?」
影胤「モチロンさ、ただこれを発生させるために内臓のほとんどをバラニウムの機械に詰め替えているがね…」
遥「…バラニウムの機械…お前まさか…!!」
影胤「改めて名乗ろう、里見君、薊島君、元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊」
蓮太郎「機械化…」
影胤「新人類創造計画、蛭子影胤」
男性１「七八七…対ガストレア用特殊部隊…実在するわけが…」

民警の一人が驚いていたが、遥は一人、涼しい顔をしていた
遥「信じるかどうかはお前等次第だ…」
影胤「その通りだよ、パンドラの箱の少年」
遥と蓮太郎は嫌な予感がし、蓮太郎は木更を、遥は涙音を押し倒した
その瞬間、今まで止まっていた銃弾が影胤と小比奈の周囲に放たれ、立っていた民警のプロモーターの何人かに被弾した
影胤「フハハハハ、里見君、君にプレゼントだ」
影胤は何処からか取り出したプレゼントボックスを蓮太郎の前に置いた
遥「待てよ…影胤…」
遥はすぐに立ち上がり、一枚のディスクを取り出していた
そのディスクには不気味な剣が描かれていた
影胤「君とはゆっくり話していたかったのだが、またの機会にしよう、小比奈、行くよ?」
小比奈「はいパパ」
影胤「絶望したまえ諸君、滅亡の日は近い…」
影胤と小比奈は割れた窓から飛び降りて行った
木更「里見君、あの男と何処であったの!?」
遥「…恐らく、蓮太郎がとあるマンションに仕事に行った時だ…」
その言葉と共にその場にいた人間は遥と涙音に注目した
遥「聖天子様だったか?　俺もこのレースに参加させて貰おうか」
聖天子「貴方は…」
遥「自己紹介がまだだったな…俺は薊島遥、昔あった政府の研究資料と超能力兵士にされそうになった闇医者…人は俺の事をパンドラの箱と呼ぶ…こいつは涙音、俺の助手だ」
聖天子「貴方が…」
聖天子が驚いていると、誰かが入って来た
木更「あれは…欠席していた大瀬コーポレーションの秘書…」
秘書「社長が自宅で殺されて…く、首が…」
蓮太郎はプレゼントボックスを見ると、下から血が流れていた

聖天子「新たな達成条件を加えます、蛭子影胤ペアよりも先にケースを回収してください、ケースの中身は悪用すればモノリスの結界を破壊し、東京エリアに大絶滅を引き起こす封印指定物です」
遥「なるほど…俺らもボチボチ行くか…帰るぞ、涙音」
涙音「イエス、マスター」
遥と涙音は自分が斬った窓のから飛び降り、巨大な鴉の背に乗った
蓮太郎「ガストレア…!?」
遥「違う、こいつはガストレアの記憶だ…」
そう言うと、遥と涙音を乗せた鴉は下に降りて行った
その光景を民警達は見ることしかできなかった

第４話

町で適当にふらついていると、蓮太郎と延珠と遭遇した
蓮太郎「お前…ここで何しているんだ」
遥「散歩だよ…俺は民警じゃなくて一般市民だからな…」
蓮太郎「よく言う、ガストレアを操る能力」
遥「さっきも言ったが違う、あれはガストレアの記憶だ…」
遥はため息をつきながら説明していた
その間、涙音はモニターで映っているＣＭを見ていた
そこには今大人気のテレビアニメ、『天誅ガールズ』のＣＭが流れていた
延珠「お主も好きなのか？」
涙音「の、ノーです!!」
遥「涙音、否定しきれてないぞ？」
涙音「うぅ～…」
遥「…なるべく早く良い物件を探しておかないとな…」
遥は苦笑いしつつも涙音の頭を撫でた
その間、涙音は嬉しそうに目を細めていた
その時、男性の声が聴こえた
男性「誰か!!そいつを捕まえろ!!」
その声の方を見ると、少女が缶詰を持って店員らしき男性と中年の男性に追いかけられていた
少女「あ、あの…」
その瞬間、少女は男性二人に捕まった
少女「離せ!!」
店員「このコソ泥め!!」
男性「お前は東京エリアの塵だ!!」
蓮太郎「おい、その子がどうした」
店員「盗みをやらかして、声をかけた警備員を半殺しにしやがったんだ」
もみくちゃになりつつも、少女は延珠に手を伸ばし、延珠はその手

を取ろうとしたが、蓮太郎が止めた
その際、揉めていた男性が通りすがりの人物にぶつかった
？「おい…」
男性「なんだ？　おま…」
男性は通りすがりの人物、銀色の天然パーマの男性に殴り飛ばされ、意識を失った
？「ギャーギャーギャー　やかましいんだよ、発情期ですかコノヤロー」
店員「あ、あんた何しているんだ!?」
？「うるせぇ!!今　甘い物控えろって、あの変人医師から言われてイライラしてるんだよ!!」
銀色の天然パーマの男性はそう言いながら店員も殴りあげた
それを見ていた蓮太郎はその人物に声をかけた
蓮太郎「銀二さん!?」
銀二「よう、蓮太郎、延珠、偶然だなこんな所で会うとは、そっちの2人は誰だ？」
銀二と呼ばれた男性は遥と涙音を見た
遥「俺は薊島遥、パンドラの箱と呼ばれている…こいつは…」
涙音「七星涙音、マスターの下僕です」
遥「涙音…お前は助手だろ!?」
銀二「お前…中学生の女を…うわぁ…」
遥「だから違うと言っているだろ!?」
そんな風にもめていると、警察らしき男性がやってきて、無理矢理少女を連れて行った
遥達はやり取りの所為で少し反応に送れた
蓮太郎「しまった!!」
銀二「おい、あいつら事情も聞かねぇであいつをどこへ連れて行くつもりだ？」
遥「このご時世だ…何処か人目の付かない場所で殺すだろうな…」
それを聞いた延珠は蓮太郎の手を掴んだ
延珠「蓮太郎!!　助けて!!　あの子と妾は話したことはないが、助

けてほしい!!」
蓮太郎「分かっている」
銀二「あいつがやった事は許されねぇ事だが……助けてやる事もないが……乗り物がねぇな…」
その時、一台の車が見えた
銀二「ヅラ!! 良いタイミングだ!! あのパトカーを追ってくれ!!」
ヅラ「ヅラじゃない!! 桂だ!!」
車の窓から黒いロングヘアーの男性が顔を出し、銀二が呼んだ呼び名にツッコミを入れた
蓮太郎「幸太郎さん!!お願いです!! 早くしないとあの子が」
桂「事情はよく分からなかったが今わかった、そう言う事なら乗れ!!」
銀二「恩に着るぜ、ヅラ」
桂「ヅラじゃない!!桂だ!!」
そのツッコミと共に、蓮太郎と銀二と遥が乗り込んだ
遥「延珠と涙音は待ってろ!!」
涙音「イエス、マスター」
延珠「妾も行きたい!!」
遥「済まないが、正義の味方の仕事はお嬢ちゃんには見せられないんでね…」
その言葉と共に、車は走り出し、パトカーの後を追った

暫らく走っていると、とある男性と遭遇した
その人物はぼさぼさの髪でグラサンをかけていた
?「おぉ、ヅラに金二じゃないか、お前等もあのパトカー追っておのか?」
桂「ヅラじゃない！桂だ!!」
銀二「金二じゃねぇ!!銀二だ!!辰斗お前もあのパトカーを?」
辰斗「なんか、物騒なことが起こりそうだったからのう、後を着けようにも車と人の脚じゃ話にならんぜよ」

桂「ならば辰斗!!お前も乗れ！追うぞ!!」
辰斗「恩に着るぜよ!!」
辰斗は車に乗り、パトカーを追跡を再開した

第5話

？「クフフフ、お巡りさんがこんな廃墟で職務怠慢とは見て呆れるなぁ」
誰もいないはずの廃墟、そこに左目を包帯で巻いた女物のような着物を着た男性が刀を持ち、警官の一人は右腕を切断されていた
奥の方を見ると、拳銃で撃たれて倒れている少女と、怯えているもう一人の警官がいた
警官1「アァァァァァァァァァ!!俺の、俺の腕がぁぁぁ!!」
警官2「ま、待て、俺だけでも見逃してくれ!!」
？「あんな事をやっておいて…テメェ等だけ生きて帰れると思うなよ偽善者警官…今裁くのはこの俺だ」
男性は鍔の無い刀を抜刀し、警官の一人の心臓を貫いた
恐怖で動けなくなったもう一人の警官の首を撥ねた
？「せめて地獄で眠りな!!　偽善者警官共!!」
男性は刀を納刀し、立ち去ろうとしていた
その時丁度、蓮太郎達が乗っていた車が到着し、蓮太郎達が中に入った
男性は柱の陰に身を隠した
そうとも知らず、幸太郎は少女の元に駆け寄った
蓮太郎「何なんだよ…これは…」
桂「おい、しっかりしろ!!気を持て……クソ、間に合わなかったか」
そんな中、銀二と辰斗はとある柱の方を見ていた
銀二「…そこにいるんだろ？　高杉!!」
高杉「クフフ、流石だな」
柱の後ろから先ほどの男性が現れた
高杉「よぉ、ヅラに辰斗じゃねぇか、何してるんだこんな所で」
桂「ヅラじゃない!!桂だ!!」
蓮太郎「あ…あんた…何をしていたんだ…？」
高杉「何をやってたって　差別主義のアホを処刑しただけだ」
銀二「高杉、テメェ、まだこんなことをしていやがったのか!?」

桂「高杉……貴様はいつまで自分の手を汚すつもりだ」
高杉「この腐った時代が終わるまで……俺は、処刑し続けるさ」
高杉は狂気に歪んでいるかのような笑みを浮かべ、そう言った後、少女の元に駆け寄った
高杉「そいつは『呪われた子供達』だ、急いで病院に連れてきゃ助かる確率はあるぜ」
蓮太郎「あんた、それを知ってて何故、助けなかった!? あんたは俺達よりも先にここにいた…だったら、助けることもできたはずだ」
蓮太郎は高杉に敵意を向け、拳銃を向けた
高杉は気にする様子もなく、煙管を取り出した
高杉「おいおい「何故助けなかったのかって」俺はここで休んでいた所　銃声が聞こえてきたから駆け寄ったらこんな状況になっていたんだよ」
蓮太郎「だからって、こんな…」
遥「そんな事を言っている場合じゃねぇぞ、桂だったな、この近くで一番近い病院を知っているか?」
桂「当然だ、この東京エリアは俺の庭、知らない場所などない!!」
遥は少女を優しく抱き上げると、車に走った
高杉「俺は、死体処理とパトカーの破壊しておく早く行け」
辰斗「なぁ晋之助、いつまでそんな事をやるつもりじゃけ…もっと平和的に解決する方法はないのかぜよ?」
高杉「知らんな」
高杉こと、高杉晋之介はバッサリ言い捨て、辰斗は悲しそうな目をしながら銀二を連れて車に向かった

小さな病院に付くと、蓮太郎は医師に引き渡そうとしていた
だが、医師は少し嫌そうな顔をしていた
遥はそれを見て、前に出た
遥「俺が執刀する…手術室を借りるぞ…」
医師「あ、あんた何勝手に…」

遥「黙れ浮気男」
遥は何時の間にか手袋を外し、医師の頭を掴んでいた
遥「こいつの命がかかっているんだ…わかったら大人しくしていな…」
遥はそう言い終えると、手術室に向かった

時間が経ち、遥が戻ってきた
蓮太郎「おい、あの子の容体は!?」
遥「手術は終わった…もう大丈夫だ…金はそうだな…俺のほうで払っておこう…」
辰斗「お前さん、本当に何者じゃ？　とてもじゃないがただの高校生とは思えんぜよ」
遥「悪いな、俺はもう大学を卒業している…」
遥は懐から万札を置いて去って行った
蓮太郎達はその様子を見ていることしかできなかった
暫くしてから、蓮太郎は病院を出た

第6話

遥が一人、誰もいない場所を歩いていると、何かの気配を感じ、ディスクを取り出した
影胤「ヒヒヒ、そう身構えなくても良い、薊島君」
遥「テメェか…変態仮面野郎…」
影胤は遥歌の背後から話しかけ、遥は嫌そうな顔をしていた
影胤「ヒヒヒ、済まないね、こんな夜分に」
遥「何の用だ、蛭子影胤…」
影胤「単刀直入に言おう、私の仲間にならないか？」
遥「仲間…？」
遥は疑問に思い、振り返った
影胤「君は、この東京エリアの在り方に不満はあるかね？　人を超えた力を持つ我々機械化兵士や呪われた子供達、そして君というイレギュラーが妨げられるこの在り方に」
遥「…ああ、不満だらけだ…」
影胤「そうか、それなら…」
遥「だからこそ断る!!　俺はただ、子供達の笑顔が見れればそれでいい、あんたがやろうとしてんのはその笑顔を奪う事だ」
影胤「…そうか、小比奈、斬って良いよ」
小比奈「はい、パパ」
その瞬間、遥の背後から小比奈が現れ、遥に斬りかかった
だが、それは突然の乱入者の妨害で阻止された
涙音が何もない腕でバラニウム製の小太刀を受け止め、蹴りを放った
小比奈はとっさに躱し、距離を取った
遥「涙音、お前何時の間に…」
涙音「マスターの帰りが遅かったのでマスターの匂いを辿ってきました」
小比奈「斬れなかった…」
影胤「普通の人の腕で小比奈の斬撃を防ぐとは…おや？」

影胤は小比奈の斬撃で切れた涙音の服の袖から何かが見えた
影胤「成程、鱗か…ということは、君のイニシエーターはモデル・クロコダイルかな？」
遥「それは教えられないな…」
遥は竹刀袋から一本の模擬刀を取りだし、肩に担いだ
涙音「マスター、如何します？」
遥「そうだな…涙音、あの変態仮面野郎を殴り飛ばすぞ…」
涙音「イエス、マスター」
二人は同時に影胤に襲い掛かった
影胤「小比奈、おやり」
小比奈「はい、パパ」
涙音「邪魔です」
小比奈が前に出たが、涙音は小比奈の小太刀を二つとも掴み、そのまま小比奈を投げ飛ばした
遥はディスクを影胤に投げつけ、影胤はそれを斥力フィールドで受け止めた
その時、遥の顔は不敵に笑っていた
遥「かかったな…」
ディスクからまばゆい光の帯が立ち上り、そこから河豚の姿をしたガストレアが現れた
影胤「何!?」
遥「その河豚、衝撃が加わると爆ぜるから視界には気をつけな」
その言葉と共に河豚のガストレアが爆発を起こし、影胤の視界が遮られた
小比奈はそれに一瞬だけ気を取られ、涙音に殴り飛ばされた
涙音「マスターの邪魔をしないでください」
小比奈「なんかむかつく!!」
小比奈はもう一度、涙音を切ろうとしたが、硬い鱗に阻まれ、小太刀が弾かれ、涙音は追撃の如く、まわし蹴りを放った、小比奈はとっさに回避して距離を取った
涙音「…マスター、少しだけ本気を出すことをお許しください」

遥「『構わない、やれ…俺もやっているからな…』」
その言葉が聞こえると、影胤に向かって、何かが飛びかかってきた
影胤はとっさに斥力フィールドで防いだ
煙が晴れると、そこには人の形をしているが、人とは言いがたいものが立っていた
身体は蒼白色の外骨格で覆われ、右腕には赤黒く脈を打ち、刃が骨のように乳白色の大剣を構え、顔の部分が青白い外骨格で覆われた単眼の異形がそこに立っていた
影胤「ほお…それが君の本性かな？」
遥「『黙れ…言っておくが、この姿は短い間だけなんでな…お前を一発殴ってから帰らせてもらうぞ…!!』」
外骨格からスキマが現れ、そこから空気が噴き出し、加速した
それと同時に、涙音の顔に淡い桜色の鱗が浮かび上がり、腕の鱗も桜色に染まった
遥は大剣を構え、影胤に斬りかかった、その際、大剣からもスキマが現れ、空気を噴出し、加速した
影胤は斥力フィールドを展開したが、その勢いは止まらず、斥力フィールドを切り裂き、遥はそのまま影胤を大剣を握っていた手を片方はずし、殴り飛ばした
影胤は少しだけふっ飛ばされたが、体制を立て直し、着地した
影胤「何と出鱈目な…」
遥「ふぅ…」
遥が大剣を手放すと外骨格が朽ち果てるように崩れ、本来の姿の遥が立っていた
小比奈は影胤が殴り飛ばされるのを見て、標的を遥に変えた
小比奈「パパを虐めるなぁぁぁぁ!!!」
遥「…しまった!!」
遥は今無防備で、防御する暇もそのための武器もない丸腰の状態だった
そんな状態で襲われたらいくら遥でも対処できずに最悪の場合死亡してしまう

小比奈は小太刀で遥の首を切ろうとした
涙音「マスターに近づくなァァァァァ!!!!」
涙音の怒号が響き、小比奈は驚き、硬直してしまい、その隙に涙音は小比奈を体当たりでふっ飛ばした
遥「はぁ…始まったか…涙音!!そこまでだ!!」
涙音「マスター、そこにいる女を殺すことを推奨します、ご命令を…」
影胤と小比奈は涙音から今までに感じたことの無い何かを感じ、恐怖を感じていた
小比奈に至っては震えていた
遥はそれを見逃さなかった
遥「涙音…よく見て見ろ…そいつ、怯えているぞ…」
涙音「…」
涙音の鱗が剥がれ落ち、大人しくなった
遥は小比奈の元に来た
遥「助手が迷惑かけたな…これはそのお詫びだ…」
遥はそう言って紫色の包み紙に包まれた飴玉を小比奈に渡し、涙音と共にその場を去って行った

第7話

蓮太郎は遥と別れた後、しばらくしてから帰路についていた
蓮太郎「あの人、本当に何でもできるんだな…手術もできて、ガストレアも自由に操れる…剣の腕前も高い…これじゃあ、延珠に笑われちまうな…」
影胤「へぇ…そうなのかい、里見君」
その声が聞こえると同時に蓮太郎は拳銃を引き抜き、構えるのと同時に、その場にいた影胤も悪趣味な改造がされた拳銃を突きつけた
影胤「ヒヒヒ、驚かせて済まないねぇ、里見君、銃を降ろしてくれないかな？」
蓮太郎「断る!!」
影胤「だろうね、小比奈、右腕を切り落とせ」
小比奈「はいパパ」
影胤が指を鳴らすと、小比奈が影から現れ、すでに抜刀している小太刀で影胤に言われた通り、蓮太郎の右腕を切り落とそうとしたが、それはとある乱入者によって妨げられた
その人物は蓮太郎のイニシエーターの延珠だった
小比奈「斬れなかった」
延珠「蹴れなかった」
二人は互いに思ったことを呟き、対峙していた
影胤「今日は君に話があって来たんだ」
蓮太郎「…話？」
影胤「私の仲間にならないか？　何故だか君のことが好きになってしまってね」
蓮太郎「ッ!?　なん…だと…!?」
蓮太郎は警戒しながら、影胤を見ていた
影胤「君はこの東京エリアの在り方が間違っていると一度も思った事は無いかね？」
それを言われた蓮太郎は図星だったのか、僅かに顔をしかめた
影胤「君は延珠ちゃんを普通の子供のふりをさせて学校に通わせて

いるそうだね？　何故そうする、彼女達はホモ・サピエンスを超えた次世代の人類だよ？　大絶滅の後生き残るのは我々力のある者達だけだ」
影胤はそう言うと、大金の入ったアタッシュケースを見せた
影胤「私に付けば、これだけではないが、最低でもこれが手に入る、それに今、私のバックにはデカいものが付いているからね、どうだね？　君にとっても破格の条件ではないかね？」
蓮太郎は拳銃を取り出し、アタッシュケースを撃ち、答えを示した
影胤「それが答えかい？」
蓮太郎は影胤の言葉に睨むだけだった
影胤「そうか…君にもふられてしまったか…」
蓮太郎「俺にも…ほかにも声をかけたというのか!?」
影胤「ああ、最も、彼のイニシエーターは現段階では最強だ、接近戦ならば負けなしだった小比奈も手も足も出なかったよ」
小比奈「…あのワニ、絶対斬る!!」
蓮太郎「ワニ？　お前が声をかけたのはいったい…」
影胤「それと一つ情報を提供するよ」
影胤は小比奈を連れて、立ち去ろうとしたとき、思い出したかのように振り向いた
影胤「薊島君はガストレアを支配するだけではなく、自らもガストレアとなり、戦う…彼を野放しにしておけば恐らくはこの世界そのものをガストレアも人間も曖昧な世界になるかもね…」
影胤はそれだけ言うと去って行った

第8話

あれから数日が経ち、遥と涙音は偶然、小学校の前に来ていた
その時、何か騒ぎ声が聞こえ、様子を見に来ると、銀二がいた
銀二「ふざけるなぁ!!テメェ等!!」
その怒声に子供達は驚き、体を震わせていた
銀二「ガキ共……延珠を責めて何か解決するのか？　アァ!!　そんなにガストレアが憎いなら…民警に入れ!!　俺が、いや　俺達が教えてやるよ対ガストレアとの戦い方をなぁ」
子供達は完全に怯え、銀二は憤怒に満ちていた
遥と涙音が駆け付け、銀二から事情を聴いた
遥「何処かからか情報が洩れて延珠が呪われた子供ってのがばれた…そんで子供達は延珠を悪役にして当たったのか…」
遥はギロリと子供達を睨んだ
そして、遥は校門を素手で捻じ曲げた
遥「餓鬼共…これでも俺は人間か？　化物か？」
子供1「え、えっと…」
遥「…答えろ…」
子供2「お、お兄さんはに、人間だし…そ、その…」
遥「ほぉ…ならば俺はガストレアになりかけの人間だ…と言ったらお前等は俺を人間だと言えるのか？」
それを問われた子供達は黙り込んでしまった
遥「…ふざけんな!!　言いたいことははっきり言いやがれ!!」
子供1・2「「ヒィ!!」」
遥「餓鬼共…ここにいた藍原延珠は化物だったか？　泣いて、笑って、怒って…お前等と変わらない人間じゃないか…？」
遥は何時の間にか手袋を外し、校門に触れていた
遥「もういい…やっぱりこの東京エリアも救う価値は無いな…涙音…目的を達成次第、東京エリアを出るぞ…」
涙音「イエス、マスター…」
遥は涙音と共に小学校を後にした

夜
あれから、延珠はふさぎ込んだかのように元気が無かった
蓮太郎はそんな延珠に何も言えずじまいだった
桂「延珠の正体がバレてしまったか……これは、とんだ災難だったな蓮太郎」
辰斗「しっかし、誰が延珠の正体をばらしたんじゃ？」
蓮太郎「さあな…今は回収を優先しないと…感染源ガストレアの目撃情報もあるからな…」
蓮太郎達は現在、輸送ヘリに乗り込み、ガストレアの目撃情報のあった未踏エリアに向かっていた
遥にも声をかけようと思ったが、どうしてもその気が起きなかった
そして、ガストレアが見えた
そのガストレアは蜘蛛の姿なのだが、自身の脚に巣を張り、パラシュートのようにして滑空していた
蜘蛛の仲間には自身の糸を編んでパラシュート状にして飛ぶものもいる
それと同じ原理で飛んでいる
蓮太郎が考察していると、突如、延珠が飛び出し、落下しながらガストレアに蹴りかかった
蓮太郎達はヘリのパイロットに頼み、何とか降ろして貰った
降りた先で、延珠は蜘蛛のガストレアと交戦していた
蜘蛛のガストレアは糸を吐き、攻撃していたが、延珠はそれらを躱し、蜘蛛のガストレアを蹴り砕いた
蓮太郎と合流した時、蜘蛛のガストレアは死んでいて、延珠は泣いていた
蓮太郎はそんな延珠を優しく抱きしめ、銀二達はそれを見ているこ

としかできなかった

泣き終えると、蓮太郎は近くに落ちていたアタッシュケースを拾おうとした
その時、何かの気配に感づいたが、その瞬間、顔を掴まれた
影胤「ご苦労だったね、里見君」
影胤はそう言い終えると、蓮太郎を投げ飛ばした
延珠は蓮太郎の元に駆け寄ろうとしたが、小比奈に小太刀を突きつけられ、そのまま戦闘に入った
銀二「俺等も忘れられちゃ困るな…」
影胤「ほお、東京の四英雄か…」
四英雄「その名で俺（儂）を呼ぶな（ぜよ）!!」
四人はそう呼ばれたのが癪に障ったのか、それぞれ、得物を構えた
高杉「辰斗　お前はあのガキを相手しろ、俺は仮面野郎を殺る」
辰斗「戦いは気が乗らんじゃが、仕方ないのう」
辰斗はガンブレードを構え、高杉も刀を引き抜いた
そして、銀二も幸太郎も得物を構え、蓮太郎と共に戦闘を開始した

遥は涙音と共に未踏エリアに来ていた
遥「涙音、こっちであっているのか」
涙音「イエス、マスター…この先から感染源ガストレアと思わしき匂いがします…ですが、そのガストレアは現在死亡したと推測されます…」
遥「死亡…という事は…誰かがすでに倒したということになるな…」
遥は誰がガストレアを仕留めたのかを予想していると、誰かが駆け

寄ってくるのに気が付き、模擬刀に手をかけた
だが、その人物が誰なのかがわかると、模擬刀をしまった
遥「延珠か…何かあったのか？　蓮太郎は？」
延珠「遥、蓮太郎が…!!」
遥「落ち着け、言わなくても、こうすりゃ分かる」
遥はグローブを外し、延珠の額に手を置いた
記憶を見た後、遥は溜息を付いた
遥「延珠、事情は分かった…お前は救護班を呼びに行け、恐らくはこの先にいる…俺達は蓮太郎達を助ける…涙音、ここから五分以内で蓮太郎のところまでいけるよな？」
涙音「愚問です、マスター…この先五百メートルの距離より、ガストレアの体液と人血の匂いがします…この距離ならば余裕です」
遥「そうか、延珠、蓮太郎の事は俺等に任せろ…いや、俺等にも任せろ…だな…」
遥はニッと笑い、涙音に背負われ、涙音は突風が起こるほどのスピードで走り出した
延珠は遥達を見送った後、走って行った

第9話

銀二と高杉は影胤に斬りかかったが、斥力フィールドで阻まれ、蓮太郎の正拳突きも防がれ、拳銃で撃ち抜かれた
影胤「私の技を一つお見せしよう…『マキシマムペイン』」
影胤は斥力フィールドを展開し、蓮太郎達を地面や岩に押し付けた
当然、成すすべもなく、押し付けられ、銀二と高杉は気を失った
桂と辰斗は小比奈と戦っているが、相手はモデル・マンティスのイニシエーター、刃物を持てば接近戦最強ともいわれる
故に、拳銃の弾丸も当たらず、防戦一方となっていた
そして、桂と辰斗は影胤からの拳銃による不意打ちをくらい、その場に崩れた
蓮太郎は何とか立ち上がり、影胤をにらみつけていた
影胤「君を生かしておくと面倒なことになる…仕事を済ませよう…」
影胤は親指で首を掻っ切る動作を取ると、蓮太郎は背後から何かで貫かれた
後ろを何とか見ると、そこには小比奈いて、蓮太郎は小比奈の小太刀で貫かれていた
小比奈「弱いくせに…弱いくせに…!!!!」
小比奈は小太刀を動かし、さらに深く刺し始めた
蓮太郎は苦痛な声をあげ、小比奈を振り払い解放されるが、ふらつき、崖の方に追い込まれていた
影胤「何か言い残すことはあるかい、死に行く友よ」
影胤は蓮太郎に拳銃を突きつけ、蓮太郎はそれを睨んでいた
蓮太郎「……地獄に…堕ちろ…」
影胤「Ｇｏｏｄ　Ｎｉｇｈｔ」
影胤が引き金を引こうとした時、何かの気配に気が付き、そちらを見た瞬間、影胤は斥力フィールドを展開する前に殴り飛ばされた
涙音「マスター、到着しました…」
遥「ごくろうさま、涙音…」

そこにいたのは涙音と遥歌のコンビだった、蓮太郎は二人を見て、何故ここにいるのかを疑問に思い、声を振り絞って声を出した
蓮太郎「遥…涙音…何でここに…？」
遥「俺も七星の遺産に用があったのを忘れたのか…？延珠にお前を助けろと頼まれているからな」
遥は冷静に言うと、蓮太郎の怪我の度合いを診察し始めた
遥「こりゃ酷いな…それに…他の奴らは軽症だが、一応応急手当はしておかないとか…涙音、その間時間を稼げるか？」
涙音「イエス、マスター…」
涙音はバラニウム製の鉤爪を装備し、二人を見た
涙音「自己紹介をまだしていませんでしたね…私は七星涙音、マスターの従順なる下僕にしてモデル・エンシェント…古代生物の因子を持つ者です…」
蓮太郎「古代生物…だと…!?」
遥「動くな…傷口が広がる…」
遥は鞄から注射器を取り出し、蓮太郎に突き刺した
蓮太郎の意識が途切れた
影胤「古代生物…ヒヒヒ、成程、あの以上に硬い鱗や皮膚は恐竜、あの異常なパワーはショートフェイスベア、ギガントピテクス、パラケラテリウムの脚とドロミケイオミムスの走力を持っているとすれば、君のイニシエーターの異常な強さには合点がいくよ」
遥「…お前が勝手にそう思うならそう思っていろ…それと、良いのか？　お前の娘でも勝てない涙音だ…俺が抑えているからまだましだが…本気を出す前に七星の遺産を持って何処かに行った方が良いと思うぞ…？」
涙音は襲って来た小比奈の斬撃を鉤爪で受け止め、その剛腕で小比奈の小太刀を空高く弾き飛ばした
そして、隙が生まれた小比奈を涙音は蹴り上げ、小比奈は簡単に空高く飛ばされた
涙音は鉤爪を外し、右足を半歩後ろに下げ、腰を落とし、左腕を顔の前にあげ、右手を後ろに引いた構えを取った

涙音「幻月流格闘奥義『芙蓉』!!」
涙音は渾身の力を籠めた右腕を落下して来た小比奈の腹めがけて突きだし、小比奈は肺から空気が抜けるという感覚を感じながら影胤と遥の方向に吹っ飛んだ
遥「おいおい…涙音、お前は…仕方が無い…」
遥はそう言いながら羊の描かれた金色のディスクを地面に叩き付けると巨大な羊毛のようなものが現れ、小比奈はそれにぶつかったが、羊毛がクッションとなり、大事に至らなかった
涙音「あ、申し訳ありません、マスター!!」
遥「涙音…お前な…まあ良い…戻れ…」
遥はムカデのガストレアを出し、蓮太郎達を乗せた
遥「七星の遺産は今はお前等にくれてやる…だが、そいつは蓮太郎が取り戻す…」
影胤「そうかい、小比奈、行くよ」
小比奈「パパ、彼奴、絶対に斬る!!」
涙音「お行きなさい…マスターと私の気が変わらないうちに…」
涙音は殺気を込めてただ淡々と機械のように小比奈に言うと、小比奈は体に刻み込まれた涙音への恐怖心が蘇り、大人しく影胤と共に去って行った
それを見送った遥は溜息を付きつつ、涙音をムカデのガストレアに乗せて東京エリアに向かった

第10話

蓮太郎が気が付くと、病院のベッドの上にいた
ベッドの横には遥と涙音、木更がいた
木更「おかえりなさい、里見君」
遥「…漸く気が付いたか…全く…間に合わなかったらどうなることだったか…」
涙音「マスター、マスターが医療ミスする確率はほぼ0、成功率は99．999％です…」
涙音が淡々と遥を自慢していて、遥は苦笑いしていた
その後、遥は真剣な目付きになり、蓮太郎を見た
遥「蓮太郎、よく聞け…影胤が持って行ったあのジェラルミンケースの中身はステージⅤガストレアを呼び出すのに必要な媒介だ…」
遥は短くそれを告げると、遥はディスクを取り出し、それをテレビの中に入れて投影し始めた
遥「通常、ガストレアはステージⅠから始まり、ステージⅣで完結する、その枠外に存在するのが、十一体のステージⅤガストレア…奴等にはバラニウムの磁場は効かない…そいつらが引き起こすのは大絶滅…影胤はそいつをやろうとしている…」
木更「蛭子影胤はモノリスの外、未踏査領域でステージⅤを呼び出す準備をしている、間もなく政府主導で大々的に追撃作戦が発動されるわ」
蓮太郎「それで奴等を止められなければ…」
木更「行くつもり？」
遥「…悪いが、そいつは許可できない…」
遥は冷酷に言い捨てると、蓮太郎が狼狽えた
だが、その眼は蓮太郎ではなく、ベッドの方を見ていた
遥「どうしても行きたいのなら、そこで眠っているお前の大事な相棒が万全の準備をしてからだな」
遥はふっと笑い、布団をめくると、蓮太郎に延珠が抱き付き、そのまま眠っていた

遥「お前がここに来てからずっと一緒だったんだ…全く、大した奴だよ…」
蓮太郎も優しい笑みを浮かべながら延珠の頭を撫でた
その時、蓮太郎の携帯電話が着信音を鳴らし、誰かからの通信が入った

連絡してきた人間、聖天子から出撃するように言われ、蓮太郎はその準備を始めていた
遥「お前のような馬鹿は…いくらドクターストップをかけても聞かなさそうだったからな…本来あと三日は安静にしなきゃならなかったんだが、特別大サービスで本日でドクターストップは解除だ」
？「成程、私の元に来たとき里見君の外傷が少なかったのはこう言う事だったか、パンドラの箱の少年」
遥「…チッ、室戸菫か…」
菫「安心しろ、私は君達を学会に突き出す気はない」
涙音「…そうですか…では、蓮太郎、延珠が目覚め次第、向かいましょう…」
涙音はそう言って遥と共に先に病室から出て行った
菫「君のパトロンからだ…それに、君達も行くのだろう？」
その言葉と共に銀二達がやって来た
彼らは蓮太郎と一緒に搬送されてきたのだが、彼らは軽傷で済んでいたため、すぐに気が付いていた
そして、菫は
桂「影胤という男…もはや人間ではない…俺達が軽傷で済んだのが奇跡だ…」
銀二「ああ…それに、小比奈ってやつもだ…見た感じ、刃物を持った彼奴は強い…」
高杉「…蓮太郎ばかりに重荷を背負わせるわけにもいかねぇしな」
辰斗「そうじゃな、儂等の武器も用意せんとな…」
菫「それならもうあるぞ」

菫はそう言って、彼らの武器を渡した

準備が終わり、蓮太郎達が出ると、その後ろには延珠がいた
今の延珠からは自信が見え、蓮太郎はフッと笑い、延珠と共に、遥の前に来た
遥「やっと来たか…まあ、何があったのかは聞かんが、お前等は先に行け、もう準備はできている…」
その言葉と共にヘリが現れた
蓮太郎達は遥が平然とヘリを呼んだことに驚き、彼が何者なのかとますます疑い始めた

第11話

蓮太郎達は未踏エリアに着くと、そこからは歩きで移動していた
というのも、ここに来る途中、ガストレアに感知され、パイロットが急いで目的地で着陸、そして急いでヘリから離れたという経緯があった
延珠「なあ、蓮太郎、この辺りに影胤がいるという話しではないのか？」
蓮太郎「その線は薄いだろうな…こんな場所、常人ならすぐに気がどうにかなっちまう、恐らく町の方だ…」
銀二「一理あるな、こんな暗い森の中に居続けたら銀さん怖くて漏らすからな!?」
遥「おい、銀二…だったな…涙音がいる前でみっともないことを言うな…涙音、この先は大丈夫か？」
銀二の言葉に遥が突っ込みながら、涙音に先の状況を確認した
涙音「この先五百メートル先に生体反応を感知しました…ですが、さほど問題にはなりません…」
桂「涙音とやら…凄い感知能力だな…」
涙音「私にはソナーの能力がありますので…それに、ピット器官も備えてありますし、犬以上の嗅覚、聴覚も優れてますので…大体はそれで感知できます…」
涙音は素っ気無く幸太郎の言葉を返した
そのまま涙音は遥の横を歩いていた
高杉「あの涙音、遥以外には結構冷たい奴だな…」
辰斗「確かに、じゃが儂等はあって間もないからのう…仕方ないぜよ」
そんな会話をしながら歩いていると、涙音が突然足を止めた
遥「涙音…何かいるのか…？」
涙音「マスター…レベルⅢガストレアが接近しております…」
蓮太郎「何だと…!?」
銀二「静かにしろ!!」

銀二が忠告し、皆物陰に隠れた
その時、黒く、巨大な肉体を持ち、三対の脚に四つの赤い眼を持つ鰐のようなガストレアが現れ、こちらの方角を見ていた
蓮太郎はこのまま出て交戦しようと思ったが、延珠を見てその考えをやめた
恐らく、あのモデル・クロコダイルのガストレアの皮膚は恐ろしく固く、銃弾も通さないだろう
そして、ガストレアが通り過ぎると、蓮太郎は一息ついた
延珠「全く、蓮太郎は妾よりも脆いくせにすぐに前に出たがる…」
遥「ハハハ、こりゃ傑作だ、餓鬼に心配される保護者ってな」
蓮太郎「笑うなよ…」
涙音「マスター、マスターも一瞬自分が仕留めようと思いましたよね？」
遥「…否定できない…」
銀二「おいおい、完全に似た者同士じゃねぇかよ」
桂「そうd…」
桂が何かを言おうとした瞬間、いきなり遠くの方で爆発音が鳴り、重低音な爆発音は空気を響かせ、辺りを振動させた
蓮太郎と遥は舌を打った
蓮太郎「馬鹿野郎!!　どこかのペアが爆発物を使いやがったな!?
……なんてことを…」
遥「マズイ…森が起きる…!」
蝙蝠たちがバサバサと騒ぎ、動物、ガストレア達の低い唸り声が木霊し、そして、先ほどとは異なる重低音が鳴り響いた
そして、目の前に巨大なガストレアが現れた
そのガストレアは六メートル以上ある巨体に長い首、爬虫類独特の獰猛な顔、赤い舌がチロチロと見え、巨大な翼が見えた
姿はまさに架空の存在であるドラゴンそのものであった
遥は姿を確認すると、竹刀袋から刀を引き抜き、たった一閃でガストレアに感づかれないほどの小さな傷をつけた
涙音「マスター、ここからの離脱を推奨します…」

遥「了解した、逃げるぞ、蓮太郎!!」
蓮太郎「あ、ああ!! 延殊!!」
延珠「まかせよ！ 蓮太郎!!」
延珠は蓮太郎を背負い、ものすごいスピードで跳躍した
涙音はそれよりも早く、遥を背負い、延珠の跳躍力を超えたスピードで走り始めた
銀二「待って～!!俺達はどうするんだよ!?」
桂「待て、何やら服に違和感を感じるんだが…？」
銀二「服……おいおいおい…これって…」
銀二達の福に何時の間にか光の帯が縫い付けられていた
銀二「待って、俺絶叫系とかマジでＮＧなんだけど!?」
高杉「あの涙音ってやつのスピードで引っ張られりゃ車よりも早いかもな」
辰斗「なはは～!! あやつも結構大胆じゃのう」
銀二「何でこんな時に限ってお前等冷静なんだよ!?」
無情にも、光の帯は引っ張られ、銀二達も猛スピードで引っ張られて行き、銀二は悲鳴を上げていた
そんな中、高杉は顔色一つ変えずに辺りを見回し、幸太郎は何故か笑っていて、辰斗は意識の大半を失っていた
銀二に出来たのは悲鳴を上げることだけであった
そんな中、高杉がさっきのドラゴンのようなガストレアが光の帯を立ち上らせながら消滅し始めていることに気が付いていた

遥「ここまでくれば問題ないか…」

銀二「じょ、冗談じゃねぇよ…銀さん危うく死ぬところだったよ!?ちょっと吐き掛けたよ!?」
涙音「私はマスターの命令を聞いていち早く離脱しただけです…それに、貴方達はマスターがとっさに助けたのだから…お礼を言ったらどうですか?」
銀二「バッキャロウ!!誰が絶叫マシーンに乗せろって言ったよ!?」
涙音と銀二が揉めている間に、蓮太郎と延珠が辺りの警戒をしていた
近くに人工物と思われる土嚢が多く積まれた建物があった
ガストレア大戦の時に築かれた防衛陣地《トーチカ》
現在は機能してはおらず、所々風化してはいるが、風よけにはなるかもしれない
そんな中、遥と蓮太郎はパチパチと薪が爆ぜる音が聞こえ、隙間を除くと火が見えた
中に誰かがいることに気が付いた二人は中に入り、拳銃を引き抜き、その人物に突き付け、それと同時にショットガンが交差した
その人物の背後から二つの影が迫り、二人が正体を確認すると、声をあげた
蓮太郎「待て、延珠!!敵じゃない」
遥「涙音!!　ストップだ!!」
二人の声を聞いた二人の蹴りはその人物の後ろで止まった
蓮太郎はその相手を見て絶句した、その人物は荒い息を吐き、虚ろな瞳を向けていた
落ち着いた色の長袖にスパッツ、ガストレア達が闊歩しているこの地獄に似つかわしくない格好をした少女だった
だが、蓮太郎と遥は見覚えがあった
延珠「銃を降ろさぬとその首を叩き落とすぞ!!」
涙音「銃を降ろしなさい…首を引きちぎられないうちに…」
遥「待て、この子は敵じゃない」
蓮太郎「お前確か防衛省であったな…覚えているか?」
少女は静かに頷いた

？「はい、覚えています」
苦しげな息を吐きながら辛そうに答えた
遥「とりあえず応急処置だけしておこう…涙音…」
涙音「イエス、マスター」
遥と涙音は少女の手当てをはじめ、蓮太郎がふと横を見ると、延殊が不機嫌そうな顔を浮かべていた
延殊「待つのだ蓮太郎!!妾はこんな女知らぬぞ!?」
蓮太郎「延殊は初めてだな、こいつは伊熊将監っていうプロモーターのイニシエーターだ」
蓮太郎は延殊に説明し、その間に銀二たちは枯れ枝を拾い集め、火の勢いを上げていた

第12話

その後、涙音のポーチに入れていた救急キットで止血をした後、包帯を巻くと、ガストレアウイルスの恩恵で傷の再生が始まった
だが、速度は延殊よりも遅かった
治療中、敵の接近を警戒するため、延殊と銀二たちは外に出て警戒していた
その間、延殊は文句を言っていた
蓮太郎「お前、名前は？」
？「千寿夏世」
遥「…夏世か…俺はあの時名乗ったが…」
夏世「覚えています、薊島遥さんですね…それと、七星涙音さん…」
夏世は落ち着いた口調で言い当て、蓮太郎はそんな夏世を見て少し考え事をしていた
夏世「あなたの相棒を怒らせてしまったようですね…」
夏世は延殊を見た
延殊は銀二達に愚痴を言い、腕を上下させながら話していた
蓮太郎「っち、何で彼奴不機嫌なんだよ…？　…まさか、もう反抗期なのか…？」
夏世「理由は明確だと思います」
夏世はまるで感情がないような口調に蓮太郎は困惑していた
数日前、蓮太郎と会った時、蓮太郎はユーモアのある人物なのだが、遥「そう言えば、お前のモデルは何だ？　こんな状況で落ち着けているということは…それなりのやつだろう…」
夏世「私はモデル・ドルフィンのイニシエーターです、直接的な戦闘は苦手ですが、普通のイニシエーターよりＩＱが遥かに高いのと記憶力があるのが特徴です…因みに、ＩＱは２１０くらいあります」
それを聞いた蓮太郎はギョッとした
遥は表情を一切崩さず、冷静だった
蓮太郎「俺の倍近くあるのかよ…」
遥「…別に驚くことか…？」

涙音「いえ、それほど大したことではありません…それよりもマスター、彼女、あの将監と言うプロモーターと一緒にいたイニシエーターと推測されます…」
遥「…そうか…だとすると、あのプロモーター…お前が後衛と言ったところか…それよりもお前に聞きたい…この森で爆発物を使ったのは…お前だな…？」
遥は一切声色を変えずに夏世に問いただした
夏世「何故、私だと…？」
遥「お前から火薬の臭いがしてな…そして、お前の怪我…それを含めて考えれば…」
夏世「お見事ですね…」
蓮太郎「凄いな、それで、何で爆発物を？」
夏世「私達はガストレアに騙されました…そのせいで将監さんとはぐれてしまいましたが…」
夏世の言ったガストレアに騙されたということに蓮太郎たちは気になり、詳しく聞くことにした
夏世「将監さんと影胤の捜索に当たっていた時、森の奥から短く光るライトパターンが見えまして、見方だと思って無警戒で近付いて行きました…ですが、よく考えてみれば鬼火のように青白いライトなんてだれも使っていないことなんてわかったでしょうが…」
涙音「…マスター、千寿から火薬の他に動物の腐敗臭がします…」
夏世「よくわかりましたね…確かに、あの時、あのガストレアから動物の腐敗臭がしました…」
遥「…動物の腐敗臭…そのガストレア、外見的にはどんな特徴があった？」
夏世「体中に不気味な花が咲いていてそこから酷い腐敗臭がして蝿が集っていましたあとは…尾部が発行していました…こちらを見ると気持ち悪くプルプルと震えて歓喜みたいなものを表していました」
夏世は震えていたが、すぐに落ち着きを取り戻し、話をつづけた
夏世「色々なガストレアを見てきましたがあれは足が竦みました…殺されるかと思って榴弾を使って…後は皆さんのご想像通りです…」

涙音「森のガストレアに襲われてあの脳まで筋肉の無礼極まりない馬鹿とはぐれて腕を噛まれた…というところでしょうか…」
夏世「…はい、幸い注入された体液は極少量だったので影響はありません…」
遥「…そうか」
遥はただ静かにそう呟いた
その時、無言だった蓮太郎が口を開いた
蓮太郎「…そいつはおそらく蛍のガストレアだな…」
夏世「蛍…？」
蓮太郎「ああ、蛍は花粉や蜜をとって生きているが、中には獰猛な肉食の蛍もいるって知ってるよな？　他のホタルの発光パターンを真似して近寄ってきたホタルを捕食するんだよ、おそらく人間を捕食するために近寄ってきそうな発光パターンを生み出した特殊進化型だろうな」
遥「それと、さっき言ってた不気味な花は恐らくラン科の植物だろうな…カビや尿、腐肉みたいなにおいを出して蝿や羽虫を誘き寄せて花粉を運んでもらう種がある…ふむ、動植混同のガストレアか…ステージはⅢってところだな…」
夏世は目を丸くしていた
夏世「そんなことがあるのですか？」
遥「あいつらに常識は通用しない…最も、一番常識外れのイニシエーターがここにいるけどな…」
遥はそう言いながら涙音を見た
涙音はただ一礼し、遥のそばに立っていた
夏世「よく見てもい無いガストレアの種類を当てられますね、里見さんと薊島さんってオタクなんですね」
遥「俺は職業柄動物の知識を得ているだけだ…オタクは蓮太郎だろ…」
蓮太郎「おい、俺も同じだぞ」
遥「…アリの巣を水没させて悦に浸っていた幼少期があったらしいな…『ノアの洪水だ』、『神の怒りを思い知れ』…まあ、楽しいだろう

な…」
夏世「分かります…」
蓮太郎「ああ、そうだよ楽しかったよ、悪いか!!」
夏世は初めて楽しそうに目を細めていた、すると、黒い受話器のようなものから野太いノイズのようなものが聞こえてきてハッとさせられた
それは無線機らしく、夏世は飛びついてダイアルを回すと声が鮮明になっていき、聞きたくない声が聞こえた
???『い…おい!! 生きてんだったら返事しやがれ!!』
夏世は目を配らせ、蓮太郎たちに喋るなと伝えてきた
蓮太郎と遥は頷いた
一から説明するのが面倒だと判断しての行動だった
夏世「音信不通だったので心配しました、ご無事で何よりです、将監さん」
将監『ったりめえだろ!! んなことより夏世、いいニュースがある』
勿体ぶった将監は言葉を区切り、髑髏のスカーフ越しに笑っているのが頭によぎった
将監『仮面野郎を見つけたぜ!!』
蓮太郎と夏世は顔を見合わせ、蓮太郎は延珠たちを呼び、遥と涙音は何かを話し合っていた
夏世「場所はどこですか?」
蓮太郎たちは将監の話を聞いて地図を広げ、将監の言ったポイントを探すとすぐに見つかった
海辺の市街地で今いる場所から近かった
将監『今近くにいる民警が集まって総出で奴を奇襲する手筈になってる、ホントは出し抜きてぇがまぁ仮にも序列が上の相手だし肝心のイニシエーターがいねぇ、いま荒れてた手柄の話がようやくまとまったところだ、仲良く山分けだってよら面白くもねぇ話だ、お前もとっとと合流しろ!!』
夏世の返答も聞かずに通信は切れる確かに将監の後ろでやかましい声が聞こえていた

襲撃計画が進みつつあることが予想できた
夏世は荷物を持ち焚火を踏み消し始めた
蓮太郎「やっぱり行くのか？」
夏世「ええ、あんな人でも私の相棒ですので…里見さん達は？」
蓮太郎は自分達が行かなくとも勝てるのではないかと思っていたが、遥が立ち上がり、刀を竹刀袋から取り出していた
遥「…夏世、けがは治っているな？」
夏世「はい、見てのとおりです」
夏世が包帯を外すと傷はなく、治癒が完了していた
蓮太郎「…行こう、結果だけでも見届けないと」
蓮太郎の言葉に遥と涙音以外の人物が頷いた
蓮太郎は町のほうを見てぼそりと呟いた
蓮太郎「勝てると思うか？」
桂「普通に考えれば戦う前に報酬の話をしている奴に勝算は無いに等しいだろうな」
銀二「早くついても生存者を見つけるのは難しいだろうな…」
蓮太郎「…行こう…」
蓮太郎たちは街に向かって歩き出した